谷崎潤一郎「少将滋幹の母」論

――新聞連載における小説形式――

風呂本　薫

一、はじめに

「少将滋幹の母」は、谷崎潤一郎が発表した戦後の第一作目にあたり、最後の新聞小説でもある。この小説は小倉遊亀の挿絵とともに、昭和二四年一一月一六日から翌年二月九日まで、「毎日新聞」（大阪・東京版共）に八四回連載されている。

発表当時、この作品が注目を受けたのは、まず、古典の蘊蓄を傾けた書き方であった。玉井幸助は、平安貴族の話である小説の素材を取りあげて、「傳へられた説話を、極めて忠實に敍述することを骨子とし、作者自身の空想によつて作り設けたところは甚だ少ない」[①]としながら、話の原典を確認している。さらにこの様な姿勢は、後年池田勉によって検討を加えられ、「典拠として特に重大な役割を荷なつているのは、主として今昔物語（世継物語が同時に並用されているらしい）と閑居の友との両書であろうか。[②]」と、作品の展開に従いながら、その主な文献の照合がなされている。

こうした典拠との比較の試みは、谷崎が「少将滋幹の母序文[③]」に述べた、古典の記述に忠実な姿勢をとりながら、小説の構想を実現していることを充分に証明するものであった。それとともに、同時代評として、佐山済がこの作品の随筆風に書かれていることを留意して述べた、「繼起と照應が全篇の骨子にもあり、（中略）讀者は、作者の現實認識というものからはぐらかされ、そうしたストーリイの起伏する展開の興味に引きずられながらついてゆく[④]」とした指摘、あるいは伊藤整の、「細部の種々の興味と、その交響的な効果が一層よく分った。[⑤]」という読後感を支える、理解の一方法として位置付けられる。

しかし、これらの取り組みは、谷崎がこの小説の単行本化の際、

序文に次の言葉を用意しておかなければならなかった程に、作品の理解のうえでの陥穽を孕んでいる。

中にたゞ一つ、作者が勝手に創作した「種本」、――つまり架空の書物の名が出て來る箇所があつて、それに關聯した部分だけは作者の空想の產物である。

谷崎は、「一般讀者の興味を慮つて、わざとそれを指摘せずに置く。」と述べているけれども、その架空の書物に該当するのが、「その八の一」で示される、「適古閣文庫所藏の寫本の滋幹の日記」[6]である。従って章による構成は、「その一」から「その七」までが平安朝の古典に即した話の展開であり、「その八」から「その十一」までが、「滋幹の日記」による架空の話と想定される。このように小説は、前半と後半の二つに大きく分けられる。古典の史実から架空に入り込むところが、この歴史小説の重要なポイントであろう。

「少将滋幹の母」は、全篇を通じて、人間の愛欲や思慕をテーマに綴られている。平中の恋愛滑稽譚を皮切りに、話の筋は自然と大納言国経の老いの自覚と北の方への愛欲から、子滋幹の母恋いへと、様変わりして読みとれるようになっている。後半は架空の設定といっても、「今昔物語集」「閑居の友」等の古典の説話部分も組み込まれており、典拠を確認していくうえで、ともすれば前半同様穿鑿に終わっているのが現状である。

戦後文学について荒正人は、問題作とする作品の、二つのあり方を示している。[7] 一つは、例えば時事的な題材を扱った、堀田善衛「広場の孤独」[8]のような、話全体が強い問題意識を持つ作品である。もう一つは、作者の思惑に反して「批評家無用論」が世間の注目を浴びた、志賀直哉「白い線」[9]のような、作品自身には別に問題性がある訳ではないのに、問題作と世間から認められるに至った作品である。

荒は「少将滋幹の母」の場合、「その充實した内容自身が問題を投げかけている」として、前者に見立てている。それは作品の基調に、谷崎の「繰り返し取りあげてきたマザー・コムプレックス」が窺われ、そこに「谷崎文學の圓熟」がみられるとするからである。この荒の戦後文学に対する見解に従えば、谷崎の久々の歴史小説であるところに、なお問題意識が求められるのではないだろうか。

本稿は、そこでまずこの小説が発表された戦後の位置に戻り、併せて典拠の穿鑿を踏まえたうえで、谷崎が新聞の連載形式に提出した創作の意図を検証していくことにする。

二、戦後の新聞小説での位置付け

「少将滋幹の母」は、「あの名高い色好みの平中」[10]に始まる平安朝の出来事について、なるべく多くの関連した文献資料でとり結ぼ

うとしている。それは余りに人物について断片に過ぎる古典の記述を、充分補おうとするものであるけれども、谷崎が古典に求めたのは、むしろ調べたうえで言い尽くされるような事柄ではなかった。

そのあたりの小説の起稿事情が窺えるものには、戦後谷崎の助手となった、榎克朗の述懐がある。その述懐によると、昭和二三年九月一六日、その頃京都・南禅寺塔頭、真乗院を仕事部屋にしていた谷崎は、初めて訪問した榎に、『続群書類従』「世継物語」の一節を示しながら、「老大納言とまだうら若い北の方との間に、子供があったか無かったか」[11]、至急その確認をするよう指示した。このことが、小説の下調べの最初にあたっている。

池田勉の先の論考によれば、この小説の主筋は、「今昔物語集」巻三〇「平定文本院侍従ヲ假借スル語」第一から、巻二二「時平大臣、國經大納言ノ妻ヲ取ル語」第八および、「世継物語」に話の原典をとり、それを「平中物語」「宇治拾遺物語」「十訓抄」等で補綴していったものとみられる。さらにそのことから、谷崎が求めようとしたものは、榎の回想より、北の方奪取事件を背景にして、説話に何ら詳しく触れられていない、国経の妻と子、「尊卑分脈」上の「滋鶩母筑前守在原棟梁女[12]」の母子に、空想の筆を加えようとしていることが窺われる。谷崎のこの姿勢は、新聞連載に当って記された、「少将滋幹の母作者の言葉」の、次の一文でも確認することができる。

要するに私は、なるたけ史實の尊厳を冒さないやうにしながら、記録の不備な隙間を求めて自分の世界を繰りひろげようと思ふのである。[13]

この歴史小説は、昭和一〇年の「聞書抄（第二盲目物語）[14]」以来十四年の隔りを経て、戦後に新聞連載の形式がとられたものである。このことを思い併せれば、谷崎が歴史小説についての考えから、戦後の新聞の状況に自作の発表を配慮したことも、作品を理解する手掛りとなろう。

ここで若干、戦後の新聞小説について概観して置きたい。共同通信の佐久間克巳は戦後を振り返り、新聞文化欄が「戦後観念派から生活派への移行[15]」という動きを持ったとしている。そのうち小説欄については、「石川、石坂、大佛の三作家を、朝、毎、讀三社でタライ回し的に起用、吉川英治、舟橋聖一、丹羽文雄、邦枝完二級が、一、二年前の新人起用の傾向と逆に、（中略）最近、一つの安定點を持つに至つている。[16]」という、大まかな傾向を捉えている。

この終戦からしばらくの時期は、新聞の解放と自由化の過渡期にあり、「少将滋幹の母」が発表された昭和二四年後半は、やっと最終的な検閲である事後検閲が廃止されながら、なお用紙配給量の制限を受けた、日刊一本立ての時期であった。

こうした状況での新聞小説について、日本新聞協会の友沢秀爾は、

「頁数が少いところから精選主義となり、各社とも良い作品をという点でのみ苦心した。（中略）新聞小説は、新聞が賣れるために大向をうならすていの際物から、新聞の格を保つためのものに、徐々にではあるが移つてゆく氣配が感じられていた。」[17]と回想している。このことは、昭和二四年当時、新聞小説が多分に文学的な一時期を担っていたことを物語っている。そこで注目されるのが、昭和二四年一〇月一日付で発表された、毎日新聞社大阪本社の世論調査である。これは、「新聞に何を望むか」というテーマで、戦後初めて、読者の新聞の受け止め方を調べたものである。

「あなたはどんな記事に興味を持つていますか」という質問では、男性の小説に対する関心が十五位中十三位、女性側の関心が十五位中二位である。そして、「連載小説は読まれるか」という識者の意見の場では、男性側から、「読む気はしない、新しいジャンルが必要だということを痛感する」という意見、女性側からは、「女の人の中には新聞の来るのを待つていて、まず小説から読む人がある、時間のある人しか読まないということになる」という意見が取り交わされている。

この世論調査の場が設けられたこと自体、自由化を受けた新聞が、自主的に読者の要求を選択して記事面に反映させようと模索したものである。従って小説欄でも、読者の興味の多様化に任せるままではなく、むしろ特定の読者向きとなっても、何らかの関心を引き付けないでは措かない、或るテーマを持った中堅の作家が起用された傾向にある。「少将滋幹の母」が掲載された前後の「毎日新聞」小説欄は、左記の表のようになる。[18]

戦後の「毎日新聞」小説欄

題名	作者	挿絵画家	開始年月日	終結年月日	回数
丹前屏風	江崎孝坪	大仏次郎	20・9・14	20・10・25	24
うず潮	林芙美子	谷伊之介	22・8・1	22・11・24	115
人間模様	川端文	丹羽実雄	22・11・25	23・4・14	140
帰郷	中西利雄	大仏次郎	23・5・17	23・11・18	184
てんやわんや	獅子重六	宮田文雄	23・11・19	24・4・15	140
風にそよぐ葦	宮本三郎	石川三郎	24・4・16	24・11・15	212
少将滋幹の母	谷崎潤一郎	小倉遊亀	24・11・16	25・2・9	84
火の鳥	川口松太郎	岩田専太郎	25・2・10	25・7・9	150
美貌の海（夕刊）	舟橋聖一	高沢圭	24・12・1	25・8・10	252
風にそよぐ葦—続編—	石川達三	宮本三郎	25・7・10	26・3・10	242
おぼろ駕籠（夕刊）	大仏次郎	岩田専太郎	25・8・11	26・2・18	189
赤道祭	火野葦平	向井潤吉	26・3・11	26・8・19	162
あばれ駄斗（夕刊）	土師清二	岩田専太郎	26・2・20	26・8・9	157

ただ、小説欄の文学的傾向は、昭和二四年一二月に夕刊の復活を迎えて、大きな転機を遂げる。新聞は自由競争の時代に入り、各社とも夕刊新聞欄は社の商業政策に迎合した、「まげもの」ばやりの通俗的な現象を来したのである。

「毎日新聞」が最初に谷崎の連載物を表明したのは、連載に先立つ一年も前の、昭和二三年一一月一日であった。「本社がおくる新企畫」と題する社告には、次に獅子文六の小説を控えながらも「谷崎潤一郎氏の新作」として、構想の段階であることが報告されている。

野村尚吾によれば、「最初は、『武州公秘話』の続篇のようなものを書きたいという話だった」[19]ということである。この企画の段階で、社は小説の題名を明らかにしていないが、いずれにせよ谷崎は、歴史小説を新聞連載の形式で発表しようとしたことが窺われる。

そして、読者の前に題名が明らかにされた次の企画広告が、翌二四年一月一日付「初春に贈る新企畫」である。ここでは、「谷崎氏の『少將滋幹の母』」と題して、小説の内容も併せて紹介されている。ことに「完成をまつて本紙に連載の予定です」との但し書きは留意してよい。

先の企画で、構想の段階から連載の予定を読者の前に表明したり、今回の企画で、事前の完結が連載を始める条件であるなど、過去「蓼喰ふ虫」[20]が休載を折々続けながら完結し、「夏菊」[21]の病気による中絶、「聞書抄」の長期休載[22]を経験している毎日新聞社は、谷崎の遅筆を熟知したうえで、なおこの小説に対しても寛容の態度を示している。

これは谷崎に限らず、前掲の小説欄の表をみても、ある程度作家の堅実な回転を利かせているようで、「風にそよぐ葦」については、前・後篇に分けて長篇化を認めているなど、その点ではこの時期の小説欄の特徴があり、一方では社の性格によるものだとも判断できる。

ところで、「少将滋幹の母」の連載が事前の完結を条件にしていることから、昭和三〇年二月一五日、「朝日新聞」に掲載された『蓼喰ふ虫』を書いたころのこと」という、談話に注目することができる。そこには、老年に及んで、新聞小説の執筆態度の変化したことが次のように述べられている。

（「蓼喰ふ虫」は――本稿筆者注）その日の出たとこ勝負で筆を進めて行き（中略）巧い工合にちゃんとまとまるという自信があり、（中略）だんだん老年になるに及んで私は用心深くなり、末尾に至るまで十分考を練ってからでなければ筆を執ることが出来なくなった。[23]

この回想に窺われるように、谷崎の戦後の新聞連載は、日を追って執筆するという、通常のやり方とは異なっているのである。この

ことを考慮に入れて、再び戦後「毎日」の小説欄の表を回数の面でみれば、谷崎の場合、他の新聞小説[24]に比べて極端に連載回数が少ないことに気づく。

一般的な分量の傾向について、佐久間克巳は、「戦後三、四年の間はテンポが早く百回乃至百二十回で回転していたが、それが最近では次第に長くなり、（中略）『佐々木小次郎』は三百回と予定され、（中略）今後は長篇大作が現われるのではないかと予想される。[25]」と、述べている。

確かに戦後の新聞小説は、「毎日」の場合二百回前後への長篇化の様相を示している。これに比べて、谷崎の今回の小説は、過去に完結した「蓼喰ふ虫」全八三回、「聞書抄」七三回とほぼ変わりのない、八四回である。戦後の新聞小説の中で、谷崎の中篇といっても良い執筆の分量と、執筆事情の例外さは、むしろ谷崎が新聞を自作の構想を実現する場と考えるうえで、特別な意味があったと仮定できる。

三、谷崎の新聞小説観

谷崎が新聞小説について戦後に直接触れた意見は、前出の「『蓼喰ふ虫』を書いたころのこと」にしか窺われない。元来遅筆が禍して、毎日を追う連載を谷崎は苦手としているはずであるが、「蓼喰ふ虫」については、この談話に窺えるように、終生好印象を抱いていた。谷崎は、その理由を「楢重君の素晴らしいさし絵に励まされつつ書きつづけて行った[26]」おかげだとしている。

谷崎には過去、この談話と同趣旨の感想を述べた文章がある。昭和八年二月九日から三日間、「大阪朝日新聞」文芸欄に連載された、「新聞小説を書いた経験」という随筆である。これによると、谷崎が後悔する羽目になるのを承知で、新聞小説を引き受けてしまう理由は、「一體に、雑誌の創作欄の讀者は主に文學青年であるのに反し、新聞は讀者層が廣いから、どういふ所に隠れた理解者がゐないとも限らない[27]」からだとしている。これは、批評家的である雑誌の読者よりも、新聞の幅広い読者層のうちに、自作を愛読してくれる人を得ようというものである。

その先例として、夏目漱石が往年文壇では敬遠されながらも、新聞によって大を成したことを引いたうえで、新聞小説の場が「『大人の讀む文學』を書くのに適するやうな氣がしたのである。」とも述べている。

こうした谷崎の新聞に対する姿勢が、「少将滋幹の母」にも通有するものと判断するためには、この意見に反映した「乱菊物語[28]」との共通性を求めておきたい。「乱菊物語」の創作姿勢は、「大衆小説乱菊物語はしがき」に窺うことができる。

世に顯はれない史實や人物を發揚せんがためではなく、作者にとつてやや自由なる空想の餘地があるからである。（中略）多少は歴史家に叱言をいはれても、首尾よく羽根を伸ばし切れることを望んでゐる。[29]

この谷崎の言葉は、「少将滋幹の母作者の言葉」の表明と、共通項で括ることができる。要するに、谷崎の歴史小説に対する創作姿勢は、過去の史実や古典などを用いて、自分の空想を導き出そうとするものである。

「乱菊物語」は、大衆小説と銘打たれている。それは、大正・昭和初年のころから文学上の隆盛となった、大衆文学ブームを反映したものである。この文学の傾向は、大正一五年一月の「大衆文芸」の創刊、翌昭和二年からの平凡社版『現代大衆文学全集』、続いて改造社版『現代日本文学全集』などが多くの読者に享受されたもので、いわゆる円本ブームである。谷崎は、大衆文学の流行と普及の中でただ流されることなく、「饒舌録[30]」に基づいた小説の質的な方向を見定めようとしている。「大衆文学の流行について」という随筆では、その明確な小説観が表明されている。

大衆文學と云ふ言葉は近頃に出來たのだが、事實は今に始まつたことではない。（中略）紅葉や鏡花の作品の如きは、西鶴近松のそれと共に大衆向きであり、純粋に日本の小説道の本流を受け繼いでゐるのである。もし告白小説や心境小説を以て高級と云ふならば、（中略）さう云ふものは決して小説の本流ではないと私は考へる。小説と云ふものは、矢張り德川時代のやうに大衆を相手にし、結構あり、布局ある物語であるべきが本來だと思ふ。[31]

この「大衆を相手にし、結構あり、布局ある物語」の源流は、さらに「直木君の歴史小説について」という評論で、「歴史的著述」に求められている。それは、現実を尊重する「西欧流の寫實主義」に対して、「歴史物」を次のような認識から「正系の文學」に捉え直すものであった。

封建時代の常識に從へば、（中略）日常市井の出來事を扱つたものは最も卑しく、それに比べれば歴史の背景を持つた物語、たとへば馬琴の作品等はいくらか品がいゝのであつた。（中略）時代が下れば下るほど「世が末になる」と云ふ思想があり、教養ある人間は常に過去の文化を憧憬し、努めてそれに倣はうとした。斯樣に現代を蔑視する傾向は東洋人の通性で（中略）あつたと思はれる。[32]

この見解は、「歴史物を『大衆文學』と稱して邪道扱ひ」したまま、通俗なものに置いて顧みない文学の傾向に反駁したものである。戦後の文学においても、過去の歴史物が捨てて顧みられない現状があることから、谷崎のこの創作姿勢が一貫していることも、想像に難くない。戦後の文学の状況は、具体的に昭和二三年一二月五日付、「朝日新聞」（東京版）紙上のコラム、「無題」に知ることができる。そこでは、既に忘れ去られた馬琴の、百年忌のことが話題にのぼっている。

さる十一月六日は嘉永元年八十二の長壽で死んだ「八犬傳」の作者馬琴

の満百年であった。（中略）藝文学界、文藝の方でなにか記念の企画ぐらいありそうに（中略）期待していたが、事実は何事も聞えず、完全に忘れられた人として過ぎてしまった。今ごろ馬琴をというのかも知れない。（中略）偉大なるフィクション作家として、（中略）少くとも馬琴を越えて進むために、馬琴から学ぶべきものはいくらでもあるはずだ。北斎は本年盛大に記念された。

コラムの筆者は、戦後の文学上、もはや江戸時代の読本にみるような、歴史物の伝統が絶えてしまったことを示唆している。谷崎はこの時点で、既に新聞小説の連載を考えており、「少将滋幹の母作者の言葉」の冒頭では、馬琴の「南総里見八犬伝」第一回を引き合いに出している。「八犬伝」について架空の話に注目し、馬琴の発想の自由さに触れたものである。

そこで、「少将滋幹の母」が、馬琴の読本形式を意識して創作されたのではないかと想定するために、馬琴の創作態度との関連をみておきたい。「八犬伝第二輯自序」では、馬琴の心境が、次のように述べられている。

稗官新奇之談。嘗含畜作者胸臆。初攷索種々因果。（中略）既而得意。則栩々然独自楽。視人之所未見。識人之所未知。而治乱得失。莫不敢載焉。世態情致。莫不敢写焉。排纂稍久。卒成冊。[33]

ここに窺われる馬琴の創作姿勢は、古典に忠実であって、自分の思いを架空に満たすことが語られており、「少将滋幹の母作者の言葉」に窺われる谷崎の創作姿勢に、全く通じていると判断できる。そこで、読本の形式にも触れておけば、馬琴は「玄同放言」巻三「詰金聖歎二」に、明確な小説観を示している。それに依ると、「小説戯文の巧拙取捨は、論じ得てこゝに盡せり」[34]として、中国の小説観のみえる「五雑俎」巻一五事部三を取り挙げている。

小説野俚諸書稗官所不載者雖極幻妄無当然亦有至理存焉如水滸傳無論已（中略）凡為小説及雑劇戯文須是虚実相半方為游戯三昧之筆亦要情景造極而止不必問其有無也[35]

この馬琴がとった中国の小説形式は、正史と異なりとるに足りない史実に基づいたもので、妄言が含まれ、それでいて道理が備わったものと捉えられている。そしてその作法は、「虚實相半」する話の構成によって作られるものだと説明されている。この意味で「少将滋幹の母」は、文字通り前半が古典をそのまま利用した「實」、後半が「滋幹の日記」による「虚」と当て嵌めて考えることができ、読本延いては中国の小説観を意識した小説形式をとっていることがわかる。

ただ、馬琴と谷崎では、小説形式の認識面で共通性が持てても、小説観には相違する点があることも、理解しておかなければならない。「水滸伝」について、馬琴は「玄同放言」の中で、次のように

評している。

大約小説は、勸懲を宗とせしものならざれば、弄ぶに足らず。水滸傳は、小説の巨擘にして、今古に敵手なけれ共、今に論議の多かるは、勸懲に遠ければなり[36]

谷崎の場合は、「『つゆのあとさき』を読む」において、馬琴と違い肯定的に受けとめて理解している。

「水滸傳」の作者が綿々として同じやうな人物と事件とを後から〳〵と繰り出して行くあくどい迄の丹念さ（中略）虚無を樂しむ人でなければあゝ迄大がゝりな空中樓閣は築けない。（中略）人生を描寫するに方つて、人間性の内面よりも外面の動きに注意を向け、個人々々を一つのユニット（單位）として、それらが醸し出す事件の波瀾の方へ重きを置いたことは（日本の作家と――本稿筆者注）軌を一にしてゐる。[37]

馬琴は小説に勧善懲悪の道徳理念を求めたのに対し、谷崎は「人生を描寫する」手段として理解している。馬琴とは求めるものの違いはあっても、谷崎は、読本の特徴が「東洋風な純客觀的の物語」形式を受け継ぐものと捉え、自作を発表するうえで有効な方法であると判断した形跡がある。

「近世物之本江戸作者部類」で馬琴は、「文を旨として、一卷にさし畫一二張ある冊子は、必ず讀むへき物なれは、畫本に對へてよみ本と、いひならはしたり[38]」と、述べている。「少将滋幹の母序文」には、「最初から、新聞の時の挿繪全部をもう一度用ひて他日これを單行本にする計畫であつた。」と、書かれており、谷崎が読本の形式を自作に応用していることは、明白である。

またこのことから、江戸時代の庶民を対象にした読本の性格を思い併せれば、新聞の小説欄は、大衆を相手に谷崎が自作を発表するうえで、格好の場であったとも理解できるのである。その点戦時中、谷崎は思想統制下に教導の道具となり下った新聞を自作の発表の場としていないのであって、戦後、第一作の発表を新聞の場に確保したのは、新聞が大衆のための「公器」として、自主性を回復したからだとも言える。

以上のことから、「少将滋幹の母」は、戦後の新聞小説であることに、谷崎なりの意味を持っている。つまり、大衆のための歴史小説を正系とした、谷崎の一貫した小説観が反映したものであり、客観的な描写を実践し、そこに自分の架空を求めた、伝統的な物語形式の小説であるとみることができる。

注

○ 底本は、『谷崎潤一郎全集愛読愛蔵版』全三〇巻、昭和五六年五月――同五八年五月、中央公論社とする。「少将滋幹の母」は、第一六巻、昭和五七年八月に所載されている。注に示した章段、連載回数は、初出の新聞に依る。

① 玉井幸助「少将滋幹の母」（風巻景次郎・吉田精一編『谷崎潤一郎の文学』二六一頁、昭和二九年七月、塙書房。

② 池田勉「『少将滋幹の母』の典拠について」（『国文学解釈と鑑賞』第

三二巻第二号、昭和四二年二月）。

③ 初出は、『少将滋幹の母』昭和二五年八月、毎日新聞社、全集第二三巻。

④ 佐山済「『少将滋幹の母』について――そのフェミニズムと平安文学」（「文学」第一九巻第六号、昭和二六年六月）。

⑤ 伊藤整「解説」（『新書版谷崎潤一郎全集』第二七巻、二七八頁、昭和三三年五月、中央公論社）。

⑥ 第五二回。

⑦ 荒正人「戦後問題作の展望」（「文芸」第一三巻第一八号〈増刊戦後問題作全集〉昭和三一年一〇月）なお、この全集には、「少将滋幹の母」が収録されている。

⑧ 初出は、「中央公論文芸特集」第九号、昭和二六年一〇月。

⑨ 初出は、「世界」第一二三号、昭和三一年三月。前掲「文芸」において、初出年月を昭和三一年一月とするのは誤り。

⑩ 「その一の一」、第一回。

⑪ 榎克朗「『少将滋幹の母』から『新訳源氏物語』へ」（「谷崎潤一郎全集　月報」第二六号、昭和四三年一二月）。

⑫ 『尊卑分脈』第二篇（『新訂増補国史大系』第五九巻、一五一頁、昭和四一年八月、吉川弘文館）。

⑬ 全集第二三巻。初出は、「毎日新聞」（大阪・東京版）昭和二四年一月三日第四面。

⑭ 「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」（夕刊）昭和一〇年一月五日―六月一五日連載。

⑮ 佐久間克巳「文芸欄＝生活派への移行」（『昭和二五年日本新聞年鑑』七一頁、昭和二四年一一月、社団法人日本新聞協会）。

⑯ 佐久間克巳「小説欄＝一つの安定点へ」（前掲『昭和二五年日本新聞年鑑』七一頁）なおこの文章については、（一九四九・七・三）の日付がある。

⑰ 友沢秀爾「『まげもの』バヤリと新聞の権威」（『昭和二六年日本新聞年鑑』六三頁、昭和二五年一二月、日本電報通信社）。

⑱ 『毎日新聞七十年』「連載読みものと囲碁将棋」五一〇―五一四頁、昭和二七年二月、毎日新聞社参照。なお、作者・挿絵画家名は併記し、夕刊の復活によるものもとり入れた。収表は戦後の朝刊十作品分の期間。全て大阪・東京版共に連載期間は同じ。

⑲ 野村尚吾「曼殊院界隈」（「谷崎潤一郎全集月報」第一六号、昭和四三年二月）。

⑳ 「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」（夕刊）昭和三年一二月四日―翌四年六月一八日連載。

㉑ 「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」（夕刊）昭和九年八月四日―九月八日連載。全二八回。

㉒ 休載については、谷崎の『聞書抄』を当分休ませて貰ひます」（「大阪毎日新聞」夕刊、昭和一〇年四月一六日第一面）なる一文がある。（全集未収録）

㉓ 全集二三巻。初出は東京版第五面。

㉔ 大仏次郎の「丹前屏風」が、終戦直後の連載小説であり、二四回と異様に短い。これは用紙事情の急迫のため中止されたもので、その後二〇年一一月から二二年七月まで、連載小説は一切掲載されなかったいきさつがある。このため、「丹前屏風」は回数の判断上、例外とする。

㉕ 佐久間克巳「小説欄」（前掲『昭和二六年日本新聞年鑑』六一頁）村上元三「佐々木小次郎」は、「朝日新聞」（夕刊、大阪・東京版共）昭和二四年一二月一日―翌二五年一二月三一日連載。

㉖ 全集第二三巻。「楢重君」とは、小出楢重のこと。

㉗「新聞小説を書いた経験」第三回（「大阪朝日新聞」昭和八年二月一一日第七面、全集未収録）。

㉘ 初出は、「大阪・東京朝日新聞」（夕刊）昭和五年三月一八日―九月五日連載。

㉙ 全集第二三巻。初出は、「大阪・東京朝日新聞」昭和五年三月一三日第二面。

㉚ 初出は、「改造」第九巻第二号―第一二号、昭和二年二月―一二月連載。この評論については、芥川龍之介（「文芸的な、余りに文芸的な―併せて谷崎潤一郎氏に答ふ」、「改造」昭和二年四月―八月連載）との、「話らしい話のある小説」論争がある。「乱菊物語」との関連は、野口武彦「宝としての物神　谷崎潤一郎の『通俗小説』」（「海燕」第三巻第八号、昭和五九年八月）を参照した。

㉛ 全集第二二巻。初出は、「文芸春秋」オール読物号、第一八巻第七号、昭和五年七月。

㉜ 全集第二〇巻。初出は、「文芸春秋」第一一巻第一一号―第一二巻第一号、昭和八年一一月―翌九年一月連載。

㉝「八犬伝第二輯自序」（『南総里見八犬伝(一)』一八一頁、昭和五九年一一月、岩波書店）底本は、旧岩波文庫版。

㉞「玄同放言」巻二（文政三年一二月、東都書肆文溪堂）本文は、『日本随筆大成』第三回、二三〇頁、昭和二年六月、吉川弘文館に依る。

㉟ 謝肇淛「五雑俎」巻之一五、三五、三六頁、寛文改元辛丑仲冬版本。謝肇淛は明代の人。冒頭「小説―至理存焉」は、馬琴の引用にはないが、あえて記した。

㊱「玄同放言」巻二「詰二金聖歎一」（前掲『日本随筆大成』第三回、二三〇頁）。

㊲ 全集二〇巻。初出は、「永井荷風氏の近業について」（「改造」第一三巻第一一号、昭和六年一一月）。

㊳「近世物之本江戸作者部類」（底本天保五年刊四巻本）巻第二「読本作者部上」一〇一頁。本文は、『近古文芸温知叢書』第五編、明治二四年五月、博文館に依る。